浮世絵の美

その十八

詩人・専門学校西日本アカデミー校長　各務　章

江戸時代に浮世絵が普及したのは、その印刷技術の発達によるとされている。

木版多色刷りが秀れた技術によって芸術的にも高く評価されきた。この事を私達が知ったのは、明治時代以後である。

特に枕絵春画の技法によってその時代の生活様式や、調度品、色恋のあり方まで知る事ができたのである。

今回は以前にも述べたが、その技法の一部についてふれてみたい。

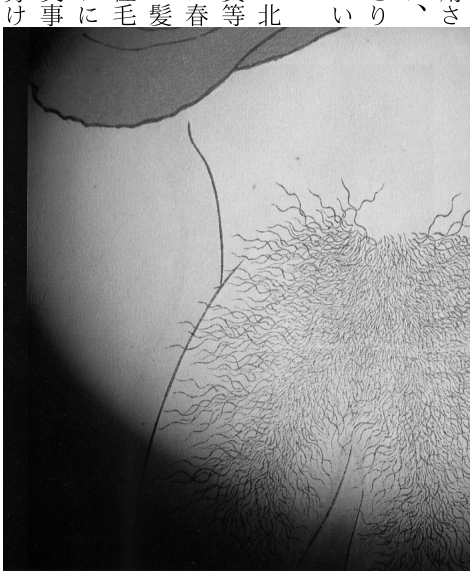
古川柳に「歌麿の毛書き彫師の泣きどころ」というのがある。

毛書き、とは髪の毛と性毛の事である。特に性毛は髪の毛の直線と違って、チリチリとよじれた形をしているのが実態である。

この毛の一本一本を彫り師は木版に彫り上げなければならない。板は主に桜が用いられたと言われる。徳川期以前は梓の木が主流だった。書物の出版に「上梓」、という言葉が使用されるのは、そのなごりとされている。

歌麿、北斎、国貞等の描いた春画には、髪の毛、性毛それぞれに細かく美事に描き分けられていて、又その彫り方も精密で実態以上にリアルに迫ってくる。

髪の場合、鬢の生え際とそれをすかして交差する毛髪が美事に彫られていて、他に例を見ない美しさである。又性毛についても、生娘のふっくらとした局部に生え揃いかけた毛の柔らかさがあり、幼さが表現されていて好ましい。



説明書によると、髪の毛の生え際を彫るのは大変高度な技術が必要とされていた。浮世絵版画の細かい線の断面を見ると、鋭角的に尖った線になっている。現在の凸版のように細くても最上端は平面になっているのと基本的に違うのである。

だから、浮世絵の場合は、繊細でシャープに摺り上がるのである。

少なくとも三枚から四枚の版木にこの線を彫るのだから彫師の技量のすばらしさが判ると思う。勿論、最初からこれ程に繊細に出来上がったわけではなく、彫師たちの努力や競争によって、腕を磨き、技を高めた結果だと言える。絵師の描いた原画に更に深みや美しさをつけ加えたのは彫師の技であった。こうする事によって、生身の女性の髪や性毛よりも更に繊細な毛摺りが可能になったと言える。

又彫師も頭と弟子達が一つのグループをなして共同作業をしていたとの事。一番困難な部分は頭彫りと言って、そのグループの指導者である頭が仕上げたと言われている。この親方制度は江戸の終り頃になると、浮世絵の中に絵師と同じように名前が書き入れられたとの説明があった。それ程に職人芸の頂点にあがった彫師がいたという事であろう。

こう言う事を知ると春画の中の毛について改めて、ゆっくりと観賞したいものである。

ここに、国貞が描いた「吾妻源氏」の「大開絵」(女性の性器を拡大して描いたもの、女性の顔の拡大図を大首絵と称したのと対をなしている)がある。

執念の毛彫り、と表現した説明図があってその見事さには驚かされる(上図参照)。

豊満な恥部に、性毛がちぢれながら生え揃っていて、その細密さには敬服するばかりである。湯文字の赤と肌の白さ、それに一本一本の細かな線。これを当時の彫師はどの

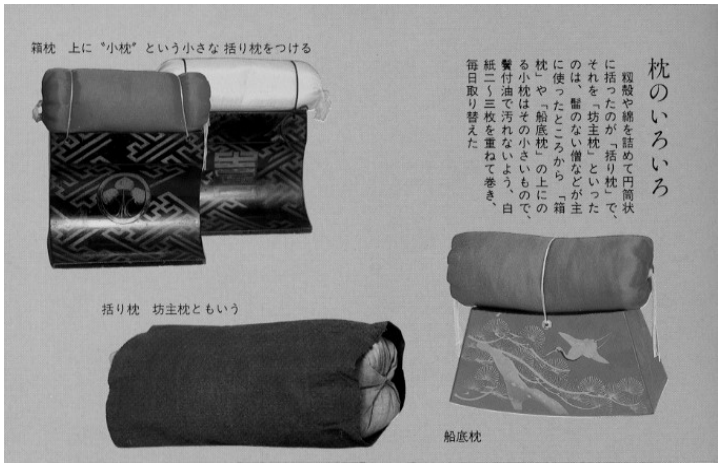
ようにして彫り上げていったのだろうか。

直接女性の恥部を見る事ができない人でも、この絵を見る事によってその生き生きとした現実を味あうことができるのではないか。

現在のカラーのヘアヌード本では、見る事のできない芸術性がある。江戸の美の最高傑作である。

この性毛については、お色気話ではいくつかの伝説がある。何時の時代も、種の保存と永続のためには動物のオスとメスの性行為がなくてはならなかった。特にオットセイやライオン等に見られるようにオスが多数のメスを従えて君臨する姿には、力強さを示すと同時に良き種を継続させるための遺伝子のなせる宿命でもあった。

人間も同じ動物であればこれと変わらないのが基本であろう。但し一夫多妻はごく限られた民族になっている現在、男性が女性を数多く見たり、さわったりする意欲が強いのは、前述の遺伝子のためではないだろうか。勿論、これは私の勝手な見解である。



しかし江戸浮世絵の中に「大開絵」があって、特に女性性器の拡大図が芸術的に残されてたのを考えると私の私見もうなづけるのではないだろうか。

毛の一本一本を、戦利品としてコレクションしている人に会った事がある。交際した女性の一本を頂くとの事である。場合によっては黙って失敬する由。眠っている間に抜き取るのは、上達したスリでも困難であろうと思うが……。この話題の中の一つに、戦前の古い話として、デパートの掃除のおばちゃんに頼んで床を掃いたチリの中から、その種の毛を拾い集めて、洗ってコレクションしたとの話があった。数多くの女性の中で着物姿の人は、必ずしも下着（パンティ類）をつけないのもある時代の事。彼女らが歩くとき、自然に性毛が床に落ちる事があるのは納得できる。それを掃除の後始末で手に入れるのは容易であろう。

昔は殆どノーパンティであった。しかし関東大震災の火災の時、東京白木屋デパートから飛び降りた女性達が着物の裾がめくれて下半身が丸見えになった時から、下着をつけるようになったとの伝説がある。

江戸時代には下着は湯文字でパンティ類がなかったのは、芸術的にも幸いであったし、男性族にとっても、誠に有難い事ではなかっただろうか。こんな事を思いながら春画の毛書きに改めて関心を深めている。

さて浮世絵の話に戻って、春画の男女のからみの背後に様々な調度や小道具が描かれているのを見ておられるだろう。

この中のいくつかを紹介してみよう。

春画の舞台装置で欠かせないのが枕である。枕を交わす。これが基本である。

花魁や女房の髪型は、全てまげやたぼ、びんと呼称される大型の形をしている。このまま横になればせっかくの髪型は崩れてしまう。そこで考えられたのが、首をのせる高い箱形の枕である。これを称して箱枕と言った。但し木の形では痛いので、その上に布で括ったものを乗せている。円筒状の袋に籾殻や綿をつめて括ったものである。これを括り枕と称して大小あったとされる。

尚箱枕にのせないで、括り枕だけのを坊主枕とも言ったとされる。工夫が進んで箱枕の底を舟のように反らせて、寝返りができやすいように作ったものを「船底枕」と呼んだ。

実態に即したものが工夫されていったのであろう。ここにも生活用具の歴史が読み取れる。

その他に、当時の風俗を伝えるものとしては夜着、煙草盆、行燈、屏風、湯呑み、手鏡と櫛、こうがい。文机、蒲団等々がある。又必需品としての懐紙、食事の鉢、小皿、徳利、盃。

これらについては、次の機会に述べてみよう。

＝つづく＝